　翌朝の空は、日の出から文句のつけようがないほどに見事な快晴であった。
　二階の寝室にある窓のカーテンの隙間から、爽やかな陽が差している。暑くも寒くもない気温で、たいへん心地がいい。
　同じ時間に起きた三人は一緒に朝食を済ませた。
一日の段取りを話しながら身支度を整え、「仕事」を始めるべく家を出た。
 ネックとノランはいつも通り、海岸に降りて漂着物を漁る。アリーベに来た当初は魚釣りを主としていたが、珍しい漂着物が流れ着くこともあり、現在では漂着物漁りを先に行ってから、魚を獲る流れになっている。もちろん、今日は噴火の調査も忘れていない。
　その間にリアムは、村へ食料調達に行く。自分達で獲った魚や手作りした雑貨などを物々交換している。交通の便が悪く自給自足が当たり前のアリーベに外からの若者は珍しく、よく働く三人は住民からの評判も良いため、乳製品や動物の肉などの食材のほかに服を作るための生地をもらうこともある。
「なあんか最近、毎日毎日同じことの繰り返しになってきたよなぁ」
「急にどうしたの？　家も増築して立派になってきたじゃない」
　空っぽのバスケットを下げたリアムが苦笑しながら反応した。
「いや、家は立派になったし、漂着物のおかげで俺たちの暮らしも潤ってきたし不満はねぇのよ？　でもなんかこう刺激が欲しいっつーか」
「刺激？」
　荷車をひくノランの後ろでネックはリアムと顔を見合わせた。
「そう！　昨日みたいに何かどーんとさ」
「どーんと……ねぇ」
　ネックは、リアムが住人と交換をする予定の干物とお弁当を代わりに持ちながら、
「無けりゃつくればいいんじゃねーの」
　と、ふあーと大きな欠伸をした。
「いや、そうだけどそうじゃねえんだよ！」
「もうノランは平和ボケしちゃって……。実際に何かあったら困るでしょ」
「そりゃそうなんだけど……はあ、綺麗なお姉さんの楽園とかねえかなあ」
　ノランは荷車を引きながら天を仰いだ。
「着いたぜ！」
 丘を下った先の三叉路で、ネックとノランはリアムを見送るのが日課になっている。
　ネックはリアムへ荷物を渡した。
「リアムこれ」
「ありがと！」
「気をつけろよ」
「うん。二人もね」
「邪獣が出たら一目散に逃げるんだぞ～」
　真っ青な空に、柔らかな光が満ちている。潮風に吹かれて、道々の鮮やかな草花がさやさやと揺れた。
　ネックとノランは、田舎道を歩いて行くリアムの背を見ていた。
「いつも思うけどさ」
 ノランがぽつり呟く。
「あれ、暑くねえのかな」
　風に靡く長いウィッグを指差した。
「今日はやけに話題が変わるな。暑いだろうな」
「四、五年前か。お前があげたんだっけ？　あいつ物持ちいいよな～」
「そうだな」
 その姿がだいぶ小さくなったところで、リアムはふいと振り返り、こちらへ大きく手を振った。
「さて、俺らもいきますか！」
　リアムに手を振り返しながらネックが言うと荷車に乗り込んだ。